名古屋市野鳥生息状況調査報告

名古屋の野鳥

２０１４

平成２６年４月－平成２７年３月調査
（２０１４．４－２０１５．３）

名古屋市

表紙の写真　　メダイチドリとトウネン（2015 年５月　藤前干潟）
写真提供　東海・稲永ネットワーク

目　　次

1　調査結果の概要 ―――― 1

2　調査・記録方法について ―――― 5

3　調査を終えて（名古屋鳥類調査会　森井豊久さん） ―――― 6

4　名古屋の自然環境 ―――― 8

5　野鳥の宝庫　藤前干潟 ―――― 8

　藤前干潟で見られる主な野鳥（シギ・チドリ類） ―――― 9

　藤前干潟で見られる主な野鳥（カモ類） ―――― 10

　名古屋市野鳥観察館 ―――― 11

6　調査データ集計

①見られた種一覧 ―――― 12

②多くの調査地で見られた種 ―――― 18

③1 か所だけで見られた種 ―――― 19

④のべ観察羽数の多かった３０種 ―――― 20

⑤1 回の観察で多く見られた３０種 ―――― 21

⑥各月の合計観察数 ―――― 22

⑦種別検索表 ―――― 24

⑧歴代の調査で記録された種一覧 ―――― 44

7　調査結果

　調査地一覧 ―――― 49

　調査地位置図 ―――― 50

　調査地案内 ―――― 51

　各調査地の観察羽数 ―――― 84

平成２６（２０１４）年度に実施した名古屋市内５１か所での野鳥生息状況調査の結果をご報告します。名古屋市では昭和５０年(１９７５年)から概ね５年毎に、名古屋市野鳥保護区を始め、市内の公園、河川・ため池、寺社林などで野鳥の生息状況調査を実施しており、今回が第９回目の調査となりました。

１　調査結果の概要

見られた鳥は２０８種類

今回の調査で観察された野鳥は５１か所の調査地であわせて２０８種類(自然分布種２０４種、外来種４種）でした。前回の平成２０年度調査では自然分布種だけで２０２種でしたので２種類増えたことになりますが、調査地数が現在とほぼ同じになった平成元年の調査から概ね２００種類前後で推移しています。

わずかながら観察種数が増えているのは、名古屋の鳥類相が豊かになったというより、１度記録された鳥種は認識しやすくなること、珍鳥の目撃情報がツイッターなどの媒体で即時に伝わるようになったことなどの要因が考えられます（ただしこのような伝聞だけで観察記録にのせることはありません)。

回	調　査　期　間（年度は４月から翌3月まで）	調査か所	科　　種
1	昭和50年5月～昭和50年12月(1975)	17ヵ所	35科126種
2	昭和５４年度(1979)	25ヵ所	42科168種
3	昭和５９年度(1984)	32ヵ所	40科171種
4	平成元年度(1989)	47ヵ所	42科185種
5	平成６年度(1994)	50ヵ所	43科192種
6	平成１１年度（1999）	48ヵ所	45科190種
7	平成１６年度（2004）	51ヵ所	41科189種
8	平成２０年度（2008）	51ヵ所	39科202種
9	平成２６年度（2014）	51ヵ所	41科204種 （45科）
	累　　計		52科251種 （５５科）

※科・種数は外来種を含まない。なお、比較のため、２６年度調査分についても過去の調査と同じ「日本鳥類目録　改訂第６版」の分類を用い、第７版による科数を（）内に示した。

今回の調査で見られた種はＰ12～16の集計表①を、過去の調査で見られた全種はＰ44～48の集計表⑧をご覧ください。

日本の野鳥の約３２％を記録

「日本鳥類目録　改訂第７版」による日本に自然分布する鳥の種数は、８１科６３３種です。今回の調査で、名古屋ではその３２％にあたる野鳥が確認されたことになります。また、「レッドリストあいち２０１５」によれば、愛知県で確認された野生鳥類は７４科４１３種で、名古屋市でその４９％が見られたことになります。

人口２２９万を擁し、市域の約９３％が市街地（都市計画上の市街化区域）の名古屋市ですが、残された貴重な自然や人が作った緑地・水辺が、野鳥たちに変化に富んだ生息環境を提供しています。

また、伊勢湾と庄内川、木曽三川をはぐくむ懐深い山岳地帯の中継点に位置する名古屋は、古来人間にとっての交通の要衝であったのと同様、移動する野鳥にとっても中継点となっており、季節ごとに変化するさまざまな野鳥が見られます。

この報告書では経験を積んだ調査員が、都心部を含む様々な観察地で、見られたすべての鳥種を記録しています。過去のデータを含めこうした地道な記録が、名古屋の生き物の多様性を明らかにしてくれます。

羽数の多かった種

カワウの群れ（藤前干潟）　　写真提供　東海・稲永ネットワーク

全観察地１２か月累計の観察羽数がとびぬけて多かったのは**カワウ**で、約１０万羽を数えました。一年中見られ、水辺のあるところならどこでも観察されますが、圧倒的に多かったのは庄内川河口（藤前干潟）で、一度の観察で１万羽近くを数えています。庄内川と新川の河口を分ける導流堤が真っ黒に見えるほどの群れは圧巻ですが、数えるとなると気が遠くなりそうですね。

スズガモ（藤前干潟）写真提供　東海・稲永ネットワーク

２番目に多く、約２万５千羽を数えた**スズガモ**は秋冬に見られる渡り鳥で、藤前干潟を始めとする河口部でしか見られないため、一般にはあまりなじみのない鳥です。逆に３番目で約２万２千羽を数えた**スズメ**は、最もなじみ深い鳥と言え、５１か所すべての調査地で観察されています。

累計羽数についてはＰ20 集計表④に、１回の観察で見られた最大羽数はＰ21 集計表⑤にまとめています。

たくさんの種類が見られた観察地

最も多くの種類が観察されたのは庄内川河口で１５１種(外来種含む)、全観察種の約６０％が見られています。シギ類やカモメ類など、ここでしか見られていない種も９種あります。望遠鏡で広い範囲を見渡せる観察しやすい環境ではありますが、上記のように羽数も膨大なので、カウントするのは大変です。

２番目は庄内緑地で、庄内川と緑地公園の両方の鳥が見られます。河川敷に作られた公園ですが、樹林が育って山の鳥も見られるようになり、バードウォッチャーが集まる名所になっています。

逆に種数が少なかったのは、都心の久屋大通公園、千種区の城山八幡の森でした。城山八幡は常緑樹の大木が多い森ですが木が大きすぎて林床が暗く、梢の鳥が観察しにくいこと、開けた水場などがないことから観察種が少なくなったようです。久屋大通公園は北の名古屋城外堀と連続しているため、樹林の小鳥が見られ、少ないと言っても２０種類以上の鳥が記録されています。

初めて記録された５種

今回初めて記録された野鳥は５種類でした。

①**ウミアイサ（カモ科）**　庄内川河口、大江川河口で記録

②**アカショウビン（カワセミ科）**

庄内緑地、鶴舞公園で記録

この２種は地域での目撃例はこれまでもあったものの、個体数が少ないため過去の調査では記録されなかったと考えられます。

アカショウビン(撮影　前田　崇)

③**オオムシクイ（ムシクイ科）**　大江川緑地、鶴舞公園、勅使池で記録

オオムシクイは「日本鳥類目録　改訂第７版」で新たにメボソムシクイから分けられた種で、以前の調査時には種として認められていなかったものです。鳴き声でメボソムシクイと区別できます。

④**カラアカハラ（ヒタキ科）**　庄内緑地で記録

日本海側で稀に見られる旅鳥で、この地域で見られるのは大変珍しく、目撃情報は瞬く間に広がり、多くの愛好家が観察・写真撮影に訪れました。

⑤**オジロビタキ（ヒタキ科）**　庄内川河口で記録

カラアカハラと同じく主に日本海側で稀に見られる旅鳥です。

外来種に注意

外来種（帰化種）の**ソウシチョウ**と**コブハクチョウ**も今回初めて記録されました。このうちコブハクチョウは逸出飼い鳥とみなされて記録されていなかったものと考えられます。

ソウシチョウ
胸の黄橙、羽の赤が目立つ

ソウシチョウも飼い鳥が逃げ出したものですが、広範囲で繁殖しており、日本の生態系に悪影響をもたらす可能性のある「特定外来種」に指定されています。外来種には珍しく山地の鳥で、今回の調査でも森のある調査地を中心に６か所で記録され、中には５０羽を超える群れが見られたところもありました。

在来種のウグイスやオオルリと競合する可能性があるとされていますので、今後も生息状況を見守る必要があるでしょう。

見られなくなった種

過去に１度でも記録があり、今回見られなかった種は４７種に上りますが、その多くは１回だけ見られた珍鳥です。過去に３回以上記録され、今回見られなくなったのは次の１２種でした。

①**ハリオアマツバメ（アマツバメ科）**　２・４・５回の調査で記録されている　山地の鳥
②**ヒメアマツバメ（アマツバメ科）**　５・６・７回に記録
③**オジロトウネン（シギ科）**　愛知県の絶滅危惧種(VU)　４・７・８回に記録　淡水域のシギ
④**キリアイ（シギ科）**　愛知県の絶滅危惧種(VU)　２～８回に記録
⑤**アカエリヒレアシシギ（シギ科）**　４～８回に記録　主に海上で見られる
⑥**タマシギ（タマシギ科）**　国の絶滅危惧種(VU)　６・７・８回に記録　見つけにくい
⑦**ヤマセミ（カワセミ科）**　愛知県の絶滅危惧種（CR）２～７回に記録
⑧**チゴハヤブサ（ハヤブサ科）**　１・４・８回に記録
⑨**コウライウグイス（コウライウグイス科）**　２・３・７・８回に記録
⑩**ハチジョウツグミ（ヒタキ科）**　２・４・６・７・８回に記録
⑪**マミジロキビタキ（ヒタキ科）**　２・５・７回に記録
⑫**ノジコ（ホオジロ科）**　国の準絶滅危惧種(NT)　１・３・４回に記録

４５種が繁殖

営巣するバン　撮影　発行者

今回の調査では４５種の繁殖が確認されました。環境省が絶滅危惧種としている**シロチドリ**、**コアジサシ**、**アオバズク**、準絶滅危惧種の**ヨシゴイ**、**ヒクイナ**、**オオタカ**も繁殖が見られ、貴重な環境が保たれていることがうかがえます。

この中で**コアジサシ**は小石で覆われた草のない河川敷などで繁殖しますが、そのような環境が少なくなったためか、人工的な造成地や駐車場で巣作りしているのが見られています。

２　調査・記録方法について

- 調査期間は平成２６(2014)年４月から平成２７(2015)年３月までの１年間です。
- 調査回数は毎月１回以上、渡りや繁殖時期にあたる４・５・９・１０月は毎月２回以上としており、複数回調査した場合は種ごとに最も大かった数を記録しています（同一日の記録とは限らない)。
- 前回までの調査報告では、観察羽数を 11～50 羽、51～500 羽のように分けて記号で示しましたが、今回は羽数データをそのまま用いました。数値は特定の日時、特定のルートでの観察羽数であって、生息数そのものではないことにご注意ください。また、調査日時などは統一していないので、同じ群れや個体が移動して複数の調査地でカウントされている可能性もあります。
- 調査員は各調査地１～２人が担当しています。多くの調査地では調査地の状況を熟知した前回までと同じ調査員にお願いしました。
- 調査は踏査により姿・鳴き声で確認できたものを記録しています。踏査ルートは調査地に詳しい各調査員が、できるだけ全域をカバーし多くの鳥が観察できるルートを選んでいます。
- 調査地は概ね前回平成２０年度と同じです。庄内川下流域で抜けていた「新前田橋～明徳橋」間を新たに調査対象とし、庄内川沿いをほぼ全域調査することができました。
- ただし、庄内川下流域では調査期間を通じて河川の浚渫工事が行われており、多くの区域で河川敷に入ることができない状況でした。野鳥の数が少ない上、観察もしにくく、橋からの観察が主になりました。
- 定着している外来種はリスト・集計に入れ、家禽・飼養種は集計はせずＰ８４以降の各調査地観察羽数の末尾に記載しました。

３．調査を終えて

調査のとりまとめをお願いした名古屋鳥類調査会代表の森井豊久さんに、今回の調査についてうかがいました。森井さんは昭和５０年の第１回から続けて調査のまとめに携わっていますが、それ以前から庄内川河口干潟の野鳥を見続けておられます。今回も自ら新川河口の調査に携わる他、５１か所の調査員のまとめ役をつとめていただきました。

野鳥観察館の来館者にミサゴの模型を見せて説明する森井さん

今回の調査結果を見て、特徴的なことはありますか？

見られた種類が増えているのは、自然が豊かになったわけじゃなくて調査の精度が上がってきているんだと思います。積み重ねてきた経験やデータがものをいう結果だから、調査員の皆さんに感謝したいですね。

特に今回の調査では若い調査員が何人か加わったのが頼もしいし、調査の後も情報交換しているので今後も楽しみです。この報告書を見て関心を持った方はぜひ仲間に入ってほしいと思います。

過去の調査との変化など気になることは？

自分がいつも見ている藤前干潟の話になりますが、４６年見続けていてシギ・チドリが減っているのは明らかですね。ハマシギなどは特にこの調査の年は少なかった。庄内川河口・新川河口・日光川河口の３調査地の羽数を足したデータがありますが（P9-10）ハマシギの羽数はおそらく潮の干満で移動する群れを二重に数えている。藤前干潟に入った総羽数より多い数字になっていると思います。

干潟の環境が変化しているのは間違いないんだけど、渡り鳥ですから繁殖地、アムール川上流とかアラスカとか、渡りの中継地なんかの環境も影響する、原因は単純ではありません。。干潟ではまず餌となる泥の中の生物、ゴカイなどが減っていて、これは川が運んでくる有機物が減ったから、川がきれいになったからなんですね。

また、水害対策としての河川工事も干潟を形成する砂質などに影響していると言われますが、それはやむを得ないこと、大都市名古屋でこれだけの干潟が保たれているだけでもすごいことだと思います。

微妙なバランスを保っている干潟の生態系に人間が手を加えるのは十分慎重でなければなりませんが、知恵を集めれば以前の豊かな干潟にもどすことはできるんじゃないかな。「藤前干潟協議会」でもいろんなアイディアが出ています。

われわれが積み上げてきた調査は、環境を守ったり回復して行こうとするとき最も重要な基礎データになると思っています。

注目すべき鳥種や羽数は？

希少種や初記録種はもちろんなんだけど、普通の鳥でも季節変化に注目すると興味深いんじゃないでしょうか。藤前干潟で言うと、各地の池などで繁殖したカルガモは８、９月ごろヒナが巣立つと藤前干潟に集まってきて大きな群れを作ります。秋最初に渡ってくるコガモやマガモとは共存するんですが、羽数の多いオナガガモがあらわれると、押し出されるように内陸に分散していきます。コガモは最初に来て最後に帰っていくんですよ。条件の悪い夏の短いところで繁殖するんだね。

バードウォッチング初心者にアドバイスを

自然の中できれいな鳥、珍しい鳥を見る楽しみをまず知ってほしい。興味が出てきたら毎日通る公園とか、週１回散歩に行く川沿いとか、定点観測して記録をつけるといろんな発見があると思いますよ。

そこから鳥の数をカウントしてみようと思う人がでてきたらうれしい。きちんとカウントした記録と、あいまいな記憶ではまったく違いますからね。カウンターは百円ショップで買えるのでぜひ挑戦してもらいたいですね。

声をかけてもらえば野鳥観察館でもお貸ししています。最初は目立つアオサギやミサゴから数えるといいですよ。

森井さんは「名古屋市野鳥観察館」職員として週２日観察指導をしていらっしゃいます。
月１回の「渡り鳥調査隊」に参加するのもお勧めだそうですよ。

野鳥の写真をブログなどで公開する人が増えていますね

希少種などの情報源としても、観察の裾野が広がるのはいいことです。ただ、写真を撮る時は鳥を脅かさない距離を保つことだけは気を付けてほしい。大きい車、大きい三脚、長いレンズ、どれも急に動かせば鳥を驚かせます。ゆっくり動いて辛抱強く待つことを心がけてほしいですね。

鳥の種類を確認するには、ピントが合っていることはもちろんですが、嘴や脚の長さ・色がわかる写真もあるといい。生息環境がわかることも大事ですね。

森井さんは今年７７歳、愛知県や環境省からも野鳥調査を依頼され、同時に３つのカウンターを操りながら望遠鏡を覗く毎日です。３０歳から鳥を見続けてきた森井さんは、積み重ねてきた観察記録が未来に引き継がれることを願い、野鳥に関心を持って野鳥観察館や探鳥会に訪れる若者にはその知識を惜しみなく伝えています。

野鳥図鑑を貸してあげるとその場で読みふけってお母さんに叱られる子どもや、リアルな鳥の絵の年賀状をくれる子供の話をする森井さんはうれしそうでした。

４． 名古屋の自然環境

野鳥の生息環境となる名古屋の環境について概説します。各調査地の環境についてはＰ51 以降の観察地ガイドでご案内しています。

位置・地勢

市域は濃尾平野の東端に位置し、東は市域の東北端にあたる東谷山(198.3m)を最高所として、標高 50～100m 程の緩やかな丘陵地をなしています。西南部は、河川の堆積によって形成された沖積平野で、国道１号線以南は 17 世紀以降干拓によって造成された地帯です。昭和 40 年代を中心に進行した地盤沈下も加わっていわゆる海抜ゼロメートル地帯となっており、最も低い所で海抜 -1.73m です。

植生・緑地

東部丘陵地帯は古墳時代から鎌倉時代の初めにかけて窯業が盛んで、薪炭採取のための二次林が広がっていました。現在では宅地化が進んでいますが、小幡緑地、東山公園、牧野ヶ池緑地、など緑地公園としてまとまった緑が残されています。かつてはたくさんあった農業用ため池の一部がこれらの緑地の中に残り、水鳥のすみかとなっています。

コナラやアベマキを主とする二次林(雑木林)は、薪炭利用がなくなって手入れをされず、過密になったり竹林が広がったりして荒れていましたが、近年「里山」として見直され、市民団体などによって手入れをしながら活用していく機運が高まっています。

市の中心部は自然の植生はほとんどありませんが、寺社林などで在来の植生に近いものが残っています。中でも熱田神宮の森はまとまった緑を残しています。歴史のある鶴舞公園や名古屋城一帯などでは大木や花・実のなる木も多く、変化に富んだ水辺もある豊かな環境です。小規模な公園や街路樹も緑のネットワークをなしています。

西部の庄内川下流域にはまとまった水田があり、河川敷には葦原が広がります。河川沿いに作られた庄内緑地・横井山緑地・戸田川緑地なども、植栽された木が成長して森を成し、新しい環境を作っています。

５． 野鳥の宝庫 藤前干潟
（ふじまえひがた）

名古屋の自然環境のなかでも特筆すべきなのが藤前干潟です。大都市・名古屋にありながら、日本有数の渡り鳥渡来地として、ラムサール条約に登録されるとともに、国指定鳥獣保護区や特別保護地区にも指定されています。

☝ ラムサール条約

正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」と称し、１９７１年にイランのカスピ海湖畔の町ラムサールで採択されたため、ラムサール条約と呼ばれています。生物、特に水鳥にとって重要な生息地、中継地となる湿地を国際的に保全することを目的としています。藤前干潟は２００２年（平成１４年）１１月１８日に１，２００番目（国内１２番目）の登録湿地となりました。

庄内川の流れが、新川、日光川と合流し、それぞれの川の上流からもたらされた栄養分をもとに造り上げた広大な干潟が藤前干潟で、今回の調査では調査地①庄内川河口、②新川河口、③日光川河口に当たります。以下にこの３調査地の主な野鳥の観察記録を示します。

シベリア等北半球の繁殖地からオセアニア等南半球の越冬地まで、約１万ｋｍの長い道のりを渡るシギ・チドリ類は、群れで一気に移動し、中継地ではしばらく滞在して、餌をとったり、羽を休めて飛行に必要な体力をつけます。藤前干潟はこの中継地として国内最大級の渡来地です。

藤前干潟で見られる主な野鳥（シギ・チドリ類）

調査地 No.①庄内川河口・②新川河口・③日光川河口　の月ごとの観察羽数の合計

※同じ群れが移動して複数個所でカウントされている可能性があります。

種	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
ハマシギ	2,029	1,947			1		888	568	506	857	1,738	1,564
トウネン	85	2,182				13	36	5				
ダイゼン	139	116	67	1	28	25	121	57	64	54	88	108
シロチドリ	21	6	1	2	3	32	58	56	98	118	84	101
チュウシャクシギ	352	153	12	14	11	10						
オオソリハシシギ	124	82			2	6	28	1				
キアシシギ	7	52	2	2	13	12	2					
アオアシシギ	38	66	2	32	69	78	35	15	5	3	5	5
ソリハシシギ	3	21	1		103	96						

ハマシギ（5 月下旬）

ハマシギ（12 月）

トウネン（5 月）

ダイゼン（10 月）

チュウシャクシギ（9 月）

オオソリハシシギ(9 月)

また、シベリアなどで繁殖したカモ類の越冬地にもなっており、下表のように年間１万羽を超えるカモが冬を越します。スズガモはほぼ河口部で過ごしますが、他のカモは群れで藤前干潟に飛来し、内陸部の川や池に分散していきます。

カルガモのみが渡りをしないカモですが､他にも夏を越すカモが相当数いることもわかります。一部のカモで繁殖も観察されています。

また、葦原や泥湿地が広がる庄内川河川敷や港区南陽地区の水田でも、干潟の鳥が満潮時に移動するなど干潟の後背地ならではの鳥類相が見られます。

藤前干潟で見られる主な野鳥（カモ類）

調査地 No.①庄内川河口･②新川河口･③日光川河口　の月ごとの観察羽数の合計

※同じ群れが移動して複数個所でカウントされている可能性があります。

種	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
スズガモ	3,361	255	27	32	31	43	1,836	3,802	7,599	1,876	1,951	3,301
オナガガモ	11	6	3	3	3	98	1,704	2,267	1,197	2,530	2,170	956
コガモ	489	145	3	4	3	534	1,307	1,282	569	526	327	333
マガモ	78	39	67	88	226	568	459	367	247	311	212	236
ホシハジロ	42	7	10	18	12	13	239	767	306	332	588	357
キンクロハジロ	363	62	5	3	3	15	265	129	168	435	525	411
ヒドリガモ	124	30	1			8	85	214	105	125	103	110
ハシビロガモ	18	1					64	70	34	90	30	58
カルガモ	117	52	365	1,769	1,351	2,398	968	656	245	154	193	205

スズガモ（奥♂　手前♀）

オナガガモ（♂）撮影　発行者

コガモ（♂）

マガモ（♂）

ホシハジロ（♂）撮影　米倉静

キンクロハジロ（♂）　撮影　米倉静

撮影者名のない写真は　東海・稲永ネットワーク（名古屋市野鳥観察館指定管理者）　提供

藤前干潟の野鳥を見るなら

名古屋市野鳥観察館

藤前干潟に飛来する野鳥を気軽に見られるのが、干潟の東、港区稲永公園にある名古屋市野鳥観察館です。

野鳥観察館は、昭和６０年４月、財団法人日本宝くじ協会から名古屋市へ寄贈され、市が管理運営している施設です。干潟に接した地上二階建ての建物には、３０倍の望遠鏡が計３０台備えられ、季節に関わらず室内で快適にシギ・チドリ類など干潟の野鳥観察を楽しむことができます。

藤前干潟の野鳥を熟知した職員が常駐し、現在の飛来状況や望遠鏡の使い方、写真の撮り方などの質問に答えてくれます。

干潟は潮が引くと現れるので、観察に適した潮の具合は毎日変わります。また、西に干潟を見るので午後は観察しにくくなります。鳥の飛来状況とあわせ、前もって電話で問い合わせるといいでしょう。

野鳥観察館の南隣には、平成１７年３月、環境省により「稲永ビジターセンター」が設置されました。この施設は藤前干潟を含む周辺の環境保全をテーマとした施設で、野鳥観察館で見た鳥を稲永ビジターセンターで調べるなど、両施設を相互に利用することもできます。

望遠鏡が固定され初めてでも見やすい

■所在地　　名古屋市港区野跡４－１１－２
■TEL・FAX　（０５２）３８１－０１６０
■入館料　　無料
■開館時間　　午前 9 時～午後 4 時 30 分
■休館日　　月曜日（祝日の場合その翌日）
毎月第 3 水曜日（祝日の場合第 4 水曜日）
12 月 29 日～翌年 1 月 3 日
■15 名以上の団体利用は事前予約(電話)必要
■アクセス　　あおなみ線 野跡駅より徒歩 10 分

夏羽のダイゼン
野鳥観察館のマークはこの鳥をデザインしたもの

■ｳｪﾌﾞｻｲﾄ
http://www.inae-bird-watching-place.org/index.html

★「稲永ビジターセンター」
TEL(052)389-5821
FAX(052)389-5822
開館時間･休館日は野鳥観察館と同じ